

## 第3回「日中未来創発ワークショップin北京～未来の都市生活を考える」 企画運営スタッフレポート

早稲田大学  
商学研究科修士一年  
ヨウ コウヒョウ

2023年11月、笹川平和財団「日本国内に向けた情報発信の強化」事業に携わって、北京でワークショップを主催し、5日間の研修を行った。中国の技術発展と国際化を学び、文化流行りと人情関係について深く理解する機会だった。母国に帰るとは言え、既に1年間ぐらい帰国しておらず、北京も12年ほどぶりだったので、変化が大きいと感じていた。また、中国で日本人の方と同行するのも初めてなので、今までのない気づきもたくさんあった。

### 1. 科学技術に関する考察

この研修で、センスタイムと百度という二つの中国企業を訪問した。これらの企業は、顔認識、無人運転、生成AIなどの分野に進出しており、中国の先端技術企業とも言える。中国の科学技術がどれほど急速に発展し、広範囲に応用されているかを肌で感じる事ができた一方、同行の方との意見交換を通じて、技術進展による課題をいくつか考え出した。

一つ目は、個人情報管理の問題である。顔認識や無人運転といった技術は、正確な機能を果たすためには実際のデータが不可欠である。これらのデータは多くの場合、ユーザーから提供されるため、その管理と保護は重要な問題となっている。個人情報の管理問題はデジタル化進展以来の問題であるが、技術進化により一層複雑になっている。特に、AI技術の発展により、顔や声といった個人情報を複製し、悪用することが可能になりつつある。例えば、AIで他人の顔や声を模倣するなどの新たな犯罪形態が生じる可能性が高まっている。したがって、技術進展は便利をもたらす一方で、個人のプライバシーとセキュリティに対する新たな脅威ももたらすため、それに対する対応が急務となっている。

二つ目は、技術にもたらす利便性の評価である。技術の進歩が目覚ましいものの、それは実際に人々の生活に便利をもたらしているかどうかの問題である。例えば、ウィチャットの「小程序」や様々な同質なアプリの存在は、人々に混乱を招き、逆に不便を感じさせることがある。また、技術の迅速な更新は、人の負担になる可能性もある。新しい技術を学び、適応するには時間が必要だが、一つの技術に慣れる前に、新しい代替技術もう登場したら、逆に疲労するかもしれない。さらに、発展している技術は、伝統的な方法を完全に置き換えるべきではないと考える。例えば、電子決済は非常に普及しているが、伝統的な現金支払いも引き続き維持すべきだと思う。特に、スマートフォンを自由に使えない人にとっては、現金が不可欠である。実際に、我々が活動後ホテルの近くに散策していた時も、携帯電話のネットワークがないために支払いをできずに帰宅できない人に遭遇したことがある。したがって、技術を評価する際には、その影響を多角的に考慮する必要があると考える。人の混乱を避け、伝統的な方法とのバランスを考慮した上で、技術の進化を受け入れることが重要だと考える。

## 2. 北京市内の国際化に関する考察

この研修では、日中両国の若者が一緒に北京市内で一日間のフィールドワークを行った。私たちのグループは、北京の恭王府と南鑼鼓巷という地域を訪問し、北京の歴史文化と市民生活を体験した。しかし、コロナの影響もあるかもしれないが、国際化都市である北京では、特に非英語圏の外国人観光客にとって、必ずしも利便性が高いわけではないことがわかった。

まず、多言語説明が不足している。観光地では英語の説明が最も多く、非英語圏の観光客が文化的背景を十分に理解するのが難しくなっている。そして、手続きも複雑である。多くの観光地事は前にウィチャットでチケットを予約する必要があるが、すべての外国人がウィチャットを熟知しているわけではないことを無視しているようだ。しかも、ウィチャットで予約済みにしても、中国公民は身分証明書をスキャンしてそのまま入場できるが、外国人はまだ窓口での手続きが必要だし、安全検査も煩雑である。最後に、交通システムの表示もそんなに便利ではない。北京の地下鉄も中国語と英語の案内のみで、漢字やピンインに不慣れた外国人にとっては理解が難しいかもしれない。また、混雑と騒音により案内が聞き取りにくいこともある。それについて、日本（東京）の交通システムを参考に、色とアルファベットで路線と駅を表示することで、国際的な利便性を高めることを提案したい。（例えば、東西線の早稲田駅は「T4」で表示している。）

## 3. 文化に関する考察

故宮や恭王府などの場所で、ライブ配信や動画撮影を行っている人をたくさん目撃した。その中の大半は他の観光客の邪魔をしないようにしていたが、一部の人は場所を長時間に占めたり、音量が大きすぎたりして、他の観光客の体験に悪い影響を与えていた。ショートビデオやライブ配信は、確かに出かけることが難しい人などに楽しみを提供しているが、現実生活にも様々な問題をもたらしている。誤った情報や歪んだ価値観の伝播などの問題も存在している。中国の関連部門はそれに対して、既に一定の対策を行っていたが、依然として解決すべき問題が多く残っている。これは世界共通の問題であり、日本でも存在していると考えため、今後これらの問題に対して共通の解決策が見つかることを期待している。

そして、研修期間中、我々はたくさん親切な中国人に出会った。彼らは日本人にとって一見すると少し怖い印象を与えるかもしれないが、実際に助けを求めたら非常に熱心に応じてくれて、「冷面心熱」と言える。このような人間性への理解は、中国人に対するステレオタイプを打破するためのきっかけとなれると考えるため、多くの人に伝えたい。日中両国国民がお互いの真の姿を知ること、文化的な偏見を減少させ、より深い人間的なつながりを築く助けとなるだろう。

この研修を通じて、私たちは中国の技術発展について深い理解を得るとともに、文化的多様性と人情の温かさを体験した。これらの経験は、今後の学習や仕事において貴重な視点と啓発をもたらすことと信じている。この研修の実現に向けて取り組んでいただいた公益財団法人笹川平和財団の皆様をはじめ、関係者の皆様に関心からお礼を申し上げます。